

【エッセイ部門・優秀賞】

龍が消えた日

私立白百合中学高等学校 第1学年 大田梨乃

あの日の龍は掻き消えるように姿を隠してしまった。

少しだけ箏に興味を持ちはじめたのは、知り合いに箏曲者がいたからだ。どのように弾き、どのように綺麗な音色を出すのかその時はまだ知らなかったが、素直に聞いてみたいと思った。知り合いが初めて聞かせてくれた時、素直にとっても綺麗だと感じた。音を奏でる姿勢から指先まで綺麗以外のなにもものでもなかった。今思えば、私はこの頃から箏に取り憑かれていたのかもしれない。

入学してから箏曲部に入部を決めるまでそう時間はかからなかった。自分でもあの綺麗な音を奏でたいと思ったからだ。箏は高貴な生き物とされている龍に似せて作られており、三本の指に爪と呼ばれる具をつけ、弦を弾いて演奏する。一見簡単そうに見えるこの行為。弦を弾いて音を出すのと、綺麗に演奏するのは違うと入部直後に思い知らされた。指先から姿勢まで何もかも意識し、一音一音奏でるのはとても至難の業で、何度も何度も弦を弾くことで感覚を掴むのだ。だが、私にとって部活の時間はとても楽しく、このままずっと弾いていたいとさえ思うほど箏の音色に魅了された。綺麗とは呼べないかもしれないが、音が地面を伝い自分の体に響くのが分かった。それからというもの、私は箏の魅力に沼落ちし続け、個人の練習を続けた。

しかし、箏を演奏する上で難しいことは各自で音を響かせることだけではなく、各演奏者が音を合わせることだった。息を合わせ、間の取り方やリズム等を揃えるのは想像していた以上に難しいものだった。

そんな入部してまもない私は、ある曲に出会った。私にとってこれが運命の日だったのかもしれない。

「龍星群」

この曲を聴いたとき私はまるで稲妻にうたれたように心が打ち震え鳥肌がたつほど感動したのを覚えている。この曲を聞いた時、私は六匹の龍を見た。合奏する一人一人の龍が合わさり、まっすぐ私の心に泳いでくるのだ。この世界にこの曲が存在していることが誇らしくなる程までにこの曲の虜となっていた。この曲は、箏初心者にはとても弾けるレベルではない難易度の高い曲であるが、私の中でこの曲をいつか仲間と弾くことが一つの夢となっていた。この曲を知ったのをきっかけに部員全員の合奏のリズムの取り方が飛躍的に上達したと言っても過言ではない。毎年の学園祭の演目を複数人で演奏する際は、お互い言葉を交わさなくてもシンクロできるほど信頼関係を築けるようになっていた。

そんな私の夢が叶う機会がやってきた。高校一年生の学園祭で憧れの龍星群を私の学年が演奏することになったのだ。私は、プレッシャーを感じつつも、楽譜を何度も見ては頭

で私達の音が気持ちよく揃う所を想像し、早く弾きたいと感じるのだった。個人での練習は、自分からやりたいと志願したソロパートもそれ以外のパートも何度も練習した。自分達もあの日見た龍を作り出すことができるのかと思うと、合わせる日が待ち遠しくてたまらなかった。でも、現実はその甘くはなかった。この高難易度の曲は我々の自信を打ち砕いた。全員の息はバラバラで龍は全く見えなかったのだ。繰り返し音を聞き、その度に何がいけないのか確認した。何をしてもあの曲が脳内に流れてくるぐらいに音を記憶しているのに、いざ私達が奏でようとするやと音は調和がとれずあの日の龍は見えなくなっていた。私には龍星群を弾く資格がないと言われていたようで悔しかった。自信を喪失していた私は、プロの演奏の映像を見ながら一挙手一投足を見逃すまいと部活でも自宅でも毎日一心不乱に練習していた。そんな私の姿をみた母は、

「昔はもっと楽しそうに演奏してたのに。」

と私に言った。その一言を聞いて、私はふと我に返った。母の言うとおりの私は、プロの音を真似ることばかりに執着し過ぎていて、自分らしく楽しく演奏することを忘れていた。肩の荷が下りた私は、水を得た魚のように演奏することが出来た。しばらく見えなくなっていた龍が、再度私の前に現れた。今までのとは違ったオリジナルの音龍だった。私はこの龍を作りたかったのだとやっと気付いたのだ。恍惚とした表情で演奏を終えた私は、すっかり自信を取り戻していた。

龍が消えたことによって得られた教訓は、箏だけでなく、日常生活にも当てはまることだった。周りと同じことをすることが良しとされるこの世界で自分らしさを表現することほどかっこいいことはないと思えた。リハーサルで私達の息はぴったりと合い、私達らしい演奏が出来た。あの日のように今度は私達の龍が誰かの心に泳いでいくのかと思うと思わず笑みがこぼれた。